

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 西村 昌也

本論文は南北に細長いベトナムの両端に広がる2つの平野、紅河平原とメコン・ドンナイ平原における旧石器時代から現代に亘る諸問題を、両地域の比較という観点から論ずることを主題としておりますが、これはほとんどベトナム考古学のすべて、否、普通は考古学の対象とみなされない近現代まで含めて考古学的方法によって包括的に捉えようという無謀な企てであり、とうてい1個人のなしうる仕事とは考えられません。しかしあえてそれに挑んだところに西村氏の不屈の闘志がありました。氏は過去6千年間の土器と陶器を時代順に排列し、各時代の遺跡分布の変化を追跡し、広く低平なデルタ地形を含む南北ベトナムの開発史の違いを抽出、比較し、この無謀な計画に相当程度の成果を収めたことに驚かされます。この研究がなお未完成であるとしても、それはベトナム人自身による考古学が開始されて50年足らず、調査件数も十分でない現状がなせるものであり、氏の力の範囲を超えるところに原因があります。

この研究の第一歩として氏は各時代の土器と陶器を年代順に排列する基礎作業を進めました。そこで行なわれたいくつかの具体的な仕事、たとえばベトナム南部新石器時代の土器編年、西暦2千年紀の陶器の編年作業などはベトナム人研究者もほとんど行っていない分野であり、氏の研究対象の広がりや精密さは驚異的であります。またベトナム北部新石器時代のフングエン期とホアロク期の前後関係を逆転させる新説は、発掘された証拠からも妥当であり、ベトナム農耕社会成立過程の理解に根本的変更を迫るものであります。

この論文に盛られた多岐にわたる成果の意義を短く要約することは困難ですが、氏が東南アジアで初めて発見した銅鼓の鋳型一つとりあげても、古代ベトナム民族の象徴とみなされてきたこの器物が、何と中国の王朝がベトナム内に築いた都城の中心で作られ、周辺地域に配布されていたという誰も夢にも想像しなかった事実を明らかにしました。

氏が提出した数々の仮説は、証拠と説得力に富むものから、今後の検討を必要とする不確かさを残すものまでさまざまであり、現在のベトナム考古学の通説と大きく異なるために現地研究者の反発を招くであろうものも少なくありません。しかしそれらの仮説に対し真摯な対応を求め、学問の目的や基本的な方法にまで掘り下げて議論を継続することは、学問の真の国際協力につながる道になるでしょう。

全体として荒削り、未完成の観を残す論文であります。部分、部分で成し遂げられた具体的な成果はきわめて大きく重要で、東南アジア考古学の分野で一人の日本人研究者によるものとしては最大の業績群と評価することができます。その意義において本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するものと結論いたしました。